

(書式 2)

## 学会参加報告書

提出日 平成 28 年 11 月 15 日

学籍番号	15N0001	学系	教育・コーチング
氏名	植松 雄太		
学会等名 (正式名称)	The 2 <sup>nd</sup> Asia-pacific Conference on Coaching Science		
開催日程	平成 28 年 11 月 11 日 ~ 平成 28 年 11 月 13 日		
開催場所 (国・都市名)	中国・上海市		
発表演題名	Why did top level junior gymnasts quit the sports		
参加報告 ・項目別に具体的に記載する。	<p>&lt;学会の全体の印象&gt;</p> <p>この学会にてアジア地域と本大学以外の国内におけるコーチング科学の研究動向を知ることができた。特に各競技の専門知識に関する研究が多く、対他者知識(コミュニケーション)や対自己への知識(コーチ自身の振り返り)について行われた発表は、本大学以外の参加者以外からはなかった。本大学関係の発表に異色さを感じるが、確実にアスリートを主体的に捉えており、伊藤准教授のキーノートセッションも含め、次を見据えたアジア地域からは一つリードしている印象があった。</p> <p>&lt;自分の研究と関連した発表とその内容&gt;</p> <p>全体を通して効果的なコーチングを研究しているポジティブな発表が多数ある中で、自身のようなアスリートにおけるドロップアウトやバーンアウト、コーチとの関係性など現場におけるネガティブな行動に着目した発表は他に見ることができなかった。その中でポスター発表にてキャンプ実習教育に関する研究発表があり、方法スタイルは異なるが、自由記述アンケートをKJ法にてカテゴリ別にして被験者の深層が結果となる点や客観的な考察に苦勞する点は同じ質研究であった。発表者に質問したところ、やはり結果と考察で整合性が持たせる点が質研究での課題になると同じ意見になり、今後も情報共有することになった。</p> <p>&lt;自身の発表への質問・コメント&gt;</p> <p>研究における独自性や問題解決、特に hierarchical という縦社会とスポーツの関連性について発表にも翌日にも、ご意見をいくつかいただくことができた。質問の中で、自身の発表に近いことが、日本国内において感情的なものとして捉えられ、正面から目を向けられておらず、指導者の横行とアスリートの泣き寝入りしている現状が知った。またいただいた意見からもスポーツ界でこの問題解決を論理化し解決する方法はルールや教育制度について研究をされている方からみても、制度改革の大きな指針になるというアドバイスをいただいた。</p>		

※ 補助金を受けた学生はこの学会参加報告書を提出すること。

提出期限は学会終了後2週間以内とする。

本報告書は学会参加報告書として日本体育大学総合スポーツ科学研究センターホームページ内に掲載されます。